氏　　名　川　名　雄一郎（かわな　ゆういちろう）
学位(専攻分野)　博　士（経済学）
学位記番号　経　博　第 308 号
学位授与の日付　平成19年7月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　経済学研究科経済システム分析専攻
学位論文題目　J・S・ミルと商業社会の科学

論文調査委員　（主査）教授 田中秀夫　教授 八木紀一郎　准教授 竹澤祐丈

論文内容の要旨

本論文は，とりわけ英米において，近年きわめて盛んに研究対象となっているジョン・ステュアート・ミル（以下ミル）の内在的な研究である。ただし，本論文は1830年代から1840年代にかけての初期のミルに焦点を絞って，ミルの「文明社会」観，言い換えれば「商業社会」あるいは「商業文明」の概念を明らかにし，そのような社会観を掘り下げて科学的認識に高めようとしたミルの思想の営為を内在的，かつ文脈的に検討しようとしたものである。

前半は3章からなり，ここではミルにおける「文明社会」の概念が，どのようなコンテクスト（文脈）で形成されたかを明らかにする。

第1章は『エディンバラ・レヴュー』を素材として，19世紀初頭のブリテンにおける商業社会論の展開を析出する。この雑誌の初期の執筆者たちは，スコットランド啓蒙の最後の偉大な思想家，デューガルト・ステュアートの影響を受けていた。したがって，ステュアートの主知主義的な色彩の強い進歩の思想をまず明らかにし，その影響を明確にするために，雑誌に掲載されたジェフリ，マコーリなどの旅行記その他の論評を垣間見る。

第2章はミルのアメリカ論を，同時代のアメリカ旅行記と比較しつつ，解読する。ミルの議論の特徴はトクヴィルとともにアメリカのメリットとディメリットをバランスよく見ている点にある。トーリーがアメリカの欠点を強調し，ジェフリやベンサムがその長所を強調したのに対して，ミルはアメリカの特殊性と文明化の進捗という普遍的側面を見ていることが明らかにされる。

第3章はミルの「文明」,「文明社会」の概念を解明する。スコットランド啓蒙から文明の概念を継承したミルは，それを中産階級と結びつけた。父ミルが文明社会の害悪を貴族階級と結びつけたのに対して，ミルはそれを文明社会に内在的なものであり，中産階級も無関係ではないと見ていた。しかし，知的要因を重視したミルは，父から継承した「完成可能性」「改善可能性」の概念によって，商業精神の腐敗や多数者の専制の危険の克服を展望することができた。

後半部の第4－6章では，1830年代に得られた「文明社会」認識を掘り下げ，それを科学的認識に高めようとした1840年代のミルが分析される。

第4章は，1830年代の「経済学の定義と方法」との関連で1843年の『論理学体系』の学問構想を分析する。ミルは文明社会に政治と社会状態という枠組みによって迫り，代議制民主主義と政治的相対主義を自らの立場とした。その相対主義は社会科学方法論にも適用され,「人間本性」の法則による因果認識の深化，中間公理としての「エソロジー」の構想に結びつき，社会変動の理論の展望となった。

第5章は，1840年代のミルの歴史と社会変動についての議論を，ギゾー，コント，ミシュレなどのフランスの思想家，また父ミルの『インド史』との関連を探りつつ，歴史変動の原因としての知的要因を重視することによって，社会の歴史的変化の法則に迫りうるとしたことを明らかにする。

第6章は，ミルの「性格形成の科学」としてのエソロジーについて詳細に検討し，ミルの社会科学におけるエソロジーの

もつポジティヴな意義を主張する。ミルにとって性格形成は重大な関心事であったが，それが『論理学体系』におけるエソロジーの構想となり，社会理論の基礎の一部を構成するとともに，主体的人間観とも繋がっていた。そしてその具体的な例証をアイルランドのジャガイモ飢饉に関するミルの議論，自作農創出論に見出すことができる。

ミルはこのように進歩を決定論的に信じた思想家ではなく，学問的知識を獲得して，主体的に適切な政策を遂行することによって，自由と進歩を目指すことを説いた思想家であった。ただし，本書は後期のミルについては課題として残している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，19世紀英国を代表する思想家であったジョン・ステュアート・ミルの1830年代から1840年代にかけての思想形成を，「文明社会」の概念をキー・タームとしてもつ「商業社会の科学」形成として分析したものである。もとより，商業社会の科学は経済学に尽きるわけではない。実際に，本論文は，経済のみならず，政治，歴史，人間本性などの広い関連を常に意識して，社会の現実と理想に迫ろうとした知的巨人ミルの学問そのものに分け入った，労作である。

文明社会認識の深化を追求するという課題は，ミルのような厖大な著作を残した知的巨人の場合，初期と後期の代表的著作に絞って整理するほうが，分かりやすく，明確になりうるが，しかし，著者は，あえて1830年代から1840年代という20年間を本論文の焦点にすえた。後期を扱わないというのは，厖大になるというほかに，初期との断絶があるので議論が複雑になるという理由もあったようであるが，初期の20年間を内在的に分析するという課題は，重厚な成果となって実った。

それは初期著作をテクストとしてただ読むというものではない。初期著作をミルの視野にあった様々なコンテクスト，論争を含む複雑な背景との関連で読むという，きわめて大きな労を払わねばならない読みの遂行である。それによって，著者が実現した成果は大きい。

第１に，スコットランド啓蒙との関係が繋がった。Ｄ・ステュアートと父・ミル，さらにはＪ・ミラーとの関係が「文明社会」の概念を手がかりとして，解明された。

第２に，より多数の思想家や学者の仕事との関連で，ミルの思想形成が，克明に描写された。1830年代の英国におけるアメリカ論一つとってみても，著者の独創性は見事である。トクヴィルだけではないのである。フランスの思想家についても相当広くおさえている。

第３に，著者が読み広げた２次文献は厖大であり，本論文によって再び蘇ったものも多い。思想史研究はテクストのコンテクステュアルな研究であるが，それには一次資料とともに，二次資料の精読も不可欠であり，著者は徹底的にそれを行っている。

しかし，本論文の最大の功績は，複雑な文脈を丹念に辿り，初期ミルにおける文明社会論の形成を克明に描き出したこと，さらに，従来ミルにおいて挫折したとされてきた「エソロジー」を蘇らせ，ミルの社会科学体系のなかに位置づけることに成功したことである。わが国での関口正司の研究が著者に影響を与えているが，その研究をさらに進めて，説得的な解釈にたどり着いたと評価できるであろう。

もう１点留意しておきたいのは，社会変動の要因としての商業精神の腐敗と知識の重視という問題である。18世紀の啓蒙史家は腐敗も知識も変動の要因として認識していた。そしてそういう要因が他の様々な要因として結合して，「意図せざる結果」を導くものとして歴史の進歩を説いた。それが進歩であったのは，啓蒙時代だったからである。意図せざる結果は，狩猟，遊牧，農耕，商業への生活様式の高度化をもたらしたとも，彼らは論じた。

他方，主知主義的思想をいくぶんは持っていたルソーは歴史を堕落と見た。腐敗，堕落は，商業社会においても起こることは，スミスもミラーも指摘した。ミルは，そうした先駆者たちの議論を踏まえて，歴史の決定論ではなく，知的要因に支えられた自由意志による社会の改革を求めた思想家であったことが，明確に描き出された。

しかし，本論文にはいくつかの疑問や課題も残された。第１に，新マルサス主義者であったミルの資本主義像と階級理解の問題がどうだったのか，ミルは商業社会を階級闘争のある社会と見ていたというが，労働者階級と中間階級との関係をどう理解していたのかが，明確でない。rank, class, station などの用語と階級の関係を明確にする必要があるのではないか。第５章でなされた父ミル『インド史』の分析は貴重であるが，それと40年代のミルにおける社会科学方法論の精緻化との関連が十分に明確になったかというと，十分な関連付けには至っていないという嫌いがある。またエソロジーの分析などにお

いて，内在的なあまり，ミルの議論に引きずられすぎていて，著者の視点が見えにくくなっている。それは，ヴィクトリア時代をめぐって，地主支配か，ジェントルマンリー資本主義か，あるいは帝国の問題をどう考えるかといった，最近の研究動向で問題になっている争点を著者が回避したことと関わっている。

こうした問題があるにも関わらず，それは本論文の価値を減じるものではない。なお，平成19年４月26日，公開審査会を行い，博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認定し，合格と認めた。